

## 慶應義塾大学湘南藤沢学会研究助成基金報告書

渡辺泰眞（健康マネジメント研究科スポーツマネジメント専修2年）

### 活動概要

【実施日時】 8月31日~9月28日

【実施場所】 スリランカ民主社会主義共和国

【参加者】 渡辺泰眞

### 目的

スリランカはスポーツを通し、長年続いた内戦の一因であった民族間対立の融和や、内戦終了後の国威発揚を図るプロジェクトを積極的に行っている。その中で重要になるのが、国際スポーツイベントの招致である。インフラ整備や国家プレゼンスの向上に一定の意義が明らかにされているイベント招致は、新しい国づくりに向けて大きな起爆剤になる。そこで、同国における国際スポーツイベント招致が与える影響について明らかにすることを目的に現地調査を行った。

### 主な面会者

Panduka keerthinanda 氏 (Sugathadasa National Sports Complex Authority Chairman)

Sriyani Kulawansha 氏 (コモンウェルスゲーム Game 2018 招致委員)

T. M. Z. Mutaliph 氏 (スリランカ中央銀行, コモンウェルスゲーム 2018 招致委員)

B. L. H. Prera 氏 (スリランカオリンピック委員会)

Prema Pinnewale 氏 (アジアユースオリンピック 2017 招致委員)

Nisyanthe l. Piyasena 氏 (スリランカオリンピック委員会事務次長)

### 面会内容

現地調査の開始時期が韓国・仁川（9月19日開幕）で行われるアジア大会直前だったこともあり、関係者のスポーツイベントに関する関心は高かった。さらに、アジア大会期間中に仁川で行われたアジアオリンピック委員会の臨時会議では、一度は危ぶまれていた2017年アジアユースゲーム（AYG）のスリランカ開催が正式に決まり、関係者の安堵の表情を間近で見ることとなった。調査はスリランカのオリンピック委員会、スポーツ省、スポーツ施設等の各所オフィスにて行い、当地における2018年コモンウェルスゲーム（招致

失敗)と2017年AYG招致活動の「レガシー」に関する質問を中心に行った。

### 成果と今後の展望

国際オリンピック委員会 (IOC) が提唱する5つのレガシーカテゴリ、都市、環境、社会、スポーツ、経済の観点では、スリランカはスポーツイベント開催に際し、経済的な発展とスポーツ文化の発展を特に意識しているようだった。と同時に、約25年の内戦を経て急激な発展が進むスリランカにおいて、国際スポーツイベントの開催に対する期待値が非常に高いことを伺い知ることができた。その一方で、これまでにない大規模なスポーツイベント招致が決まったことで、金銭はもちろん、人的リソースやインフラ整備の準備に関する不安を口にする関係者もいた。発展途上国と呼ばれる国のスポーツイベント開催計画には、いわば「大風呂敷」を上げるかっこうとなっている内容が多数存在し、この点について招致を決める側と実際に招致に向けた準備を行う側との国内における意識の差があることが示唆された。

このような不安が近年問題視されているスポーツイベントの「負の遺産」として顕在化することのないように、対外的な支援の必要性があると感じた。そのためにも、私自身を含めこの分野における研究や調査が重要であることを強く実感した。

2020年東京オリンピックを控えスポーツにおける「国際貢献事業」の推進を提唱する日本が、こうした不安を持つ国にスポーツイベント開催成功に向けたノウハウを提供することも、重要な支援策のひとつとして検討する必要があるのではないだろうか。



Figure 1 : スポーツ省外観



Figure 2 : スポーツ施設にて



Figure 3 : オリンピックハウスにて